

「重い責任。でも、 やって良かった」

厚別西地区民生委員・児童委員
前田美樹子さん

感謝したい家族の協力

現在、厚別区には188名の民生委員・児童委員が在職し、各地域で活躍しています。

厚別西地区の前田美樹子さん(43歳)は、区内で最年少の民生委員です。子育てだけでなく、仕事をしていることもあり、地域活動は学校の読み聞かせボランティアをしたことがある程度という前田さん。2年前、現在小学校6年の娘さんと長年一緒に参加しているラジオ体操で、顔見知りの方から、民生委員に欠員が出たのでやってみないかとの誘いを受けました。

「高齢者の見守りが主な職務」という程度の認識しかなかった前田さんは、あらためてインターネットなどで民生委員・児童委員の制度や仕事を調べてみて、多岐にわたる職務や責任の重さに驚いたといいます。しかし、同時にやりがいも感じ、持ち前の向学心に火が着きました。

家事や仕事に、子どもの学校行事の参加などの時間を加えると、民生委員活動に割ける時間は限られます。それだけにいかに時間を有効に使うかをいつも考えています。幸いプログラマーのご主人は、多忙ながらも理解があり、「いろいろな面で協力してくれて、ほんとうに感謝しています。」と前田さん。人のために勉強したり、一生懸命活動しているお母さんは、娘さんへの「教育的な効果も少しはあるかな」と笑顔で語ります。

訪問先の高齢者から学ぶことも

あつという間の2年間。民生委員・児童委員として、「ひと通りのことは覚えたつもりですが、さまざまな行政サービスとか、もっと知っていればさらにお役に立てるかもしれないのに…」といます。そう意味ではまだまだです。」と謙虚に語る前田さんは、向上心にあふれています。

大変なことばかりのようですが、民生委員をやって良かったこともたくさんあるといいます。

「子育て中の自分には見えていなかった高齢者世代の生活イメージ。それを知ることができたのは、自分たちのライフサイクルを考えるうえで、とても大きいものがあります。高齢者とひとくくりにはできない多様な考え方や生き方があることもわかりました。」前田さんはさらに続けます。



「高齢者の皆さんとお話をしていて、それぞれの人生経験の積み重ねで得た『知恵』をいただけることは、ほんとうに貴重です。」

一方で、ちょっと辛い経験も。以前からの知り合いで時折お世話になることもあった近所の方が、昨年様子がおかしくなってきました。やや認知症も疑われますが、本人に病識はなく、区の保健師や地域包括センターなどにも連絡して、一緒に対応しています。民生委員としてもっと知識を得たいと、認知症サポーター養成講座も受講しました。

安易に人には勧められない

民生委員を続けていくうえで、懸念することはやはり時間の足りなさ。担当する高齢者一人ひとりから話を伺うと、いくら時間があっても足りず、月々の訪問回数も限界を感じるといいます。

「私の住む厚別西地区は、住環境がとても良く、最近増えている児童虐待の話もほとんど聞くことがありません。そういう点では、地域に恵まれていると言えるかもしれませんが、今後、児童委員としての活動領域をどこまで広げることができるか。また、自分の娘が成長していくうえで、こうした活動にどれだけ時間を割けるのか。」前田さんには現役世代ならではの不安があるといいます。

「民生委員・児童委員の仕事は、ほかの人には軽々しくやってみませんかとは言えません。単なるボランティアと違い、責任がものすごく重いです。でも、私は若いうちから民生委員を経験して良かったなと思っています。」

「地域のおせっかい おばさんかな」

厚別南地区主任児童委員
遠藤 聖子さん



区家庭児童相談室は、とても熱心に取り組んでくださり頼りになります。学校訪問も増え、情報が多く入るようになりました。」と、区役所など関係機関との絆を大事にしています。

つなぎ役と割り切りながらも、どこまで踏み込むべきか悩むことがあるといいます。4年ほど前、ある父子家庭に関わりました。子どもたちの幸せを願って支援していく過程で「父親に自覚してもらわなければ解決できないわけですが、支援を深めると頼られ過ぎて、その家庭の自立に結びつかないというジレンマがありました。」

ボランティア人生が大好き

厚別区の民生委員・児童委員188名のうち、13名が乳幼児から高校生世代までの「児童」を担当する主任児童委員。その一人が厚別南地区に住む遠藤聖子さん(54歳)です。

主任児童委員となって11年目。その前は、町内会の役員のほか、子どもさんが通っていた共栄小学校で、約10年間、学校図書館地域開放のボランティア司書をしていました。「町連の女性部では最年少だったかもしれません。上の男の子が大学まで野球を、下の女の子も高校で吹奏楽部にいたので、その支援活動や親同士のコミュニティ活動もずっとやっていました。そういうのが好きなんです。」と明るく笑います。「地域の子どものために」と町内会長に頼まれ、主任児童委員を引き受けました。

自分はプロへのつなぎ役

主任児童委員として心掛けていることは何ですかと質問すると「一言でいえば、『地域のおせっかいやきのおばさん』かな。主任児童委員に任命された時は、その名称にちょっと偉そうな感じがして違和感を持ちました。でも、自分だけで全部解決できるわけではないと気がついたとき、ふっと気持ちが軽くなりました。」といます。

「自分が答えを出すのではなく、しっかり話を聞いたうえで、区役所をはじめ、各分野の専門家、つまりプロにつなぐことが私たちの役割だと思っています。」区の家家庭児童相談室に相談することが多いという遠藤さん。「厚別

人との出会いは貴重な財産

遠藤さんは区内で高齢者への配食サービスの仕事もしています。仕事柄、高齢者の安否確認にも関わり、家で倒れていた方を発見して、救急車を呼んで命を救えたこともあります。

家庭と仕事を両立させ、さらに主任児童委員などのボランティア活動も続け、「毎日、時間との闘いです。正直言ってきつと思うこともあります。」という遠藤さん。

家事を分担してくれ、外での活動を理解してくださったご主人。子どもさんが小学生の頃、仕事で帰りが遅くなったため家に入れなかった遠藤さんの子どもを、自分の家に上げて預かってくれた近所のおばさん。多くの人に支えられながら社会貢献をしてきました。「たくさんの人と出会えることは、私にとってとても貴重な財産になります。」とやさしい笑顔で語ってくださいました。

民生委員・児童委員とは

国と札幌市から委嘱を受けた特別職の地方公務員。任期は3年で更新もあります。報酬はありませんが、交通費などの活動費が支給されます。

主な活動は、65歳以上の世帯の調査、一人暮らし高齢者世帯の訪問による安否確認、生活保護申請や社会福祉協議会の貸付金申請時の意見書作成のほか、福祉相談、高齢者や子育てのサロン運営など多岐にわたります。

民生委員・児童委員のうち、いじめや不登校、児童虐待など、児童の問題解決に関わるのが主任児童委員です。いずれも法律によって秘密を守る義務が課せられ、それは退任した後も及びます。